

神<sup>じん</sup>  
社<sup>しゃ</sup>  
造<sup>ぞう</sup>  
宮<sup>みや</sup>



頼信よりのぶの葬儀を終えた景弘かげひろは、さつそく神社造営の具体計画にとりかかった。

清盛の内諾を得ているものの、詳細を示し朝廷の認可を得る必要がある。その申請書を『解げ』という。頼信の遺志を継いだ景弘は、心血を注いで神社造営の図面作成の指揮に当たった。

景弘がまず決めなくてはならないことは、海上に建設することによる幾つかの懸念を払拭ふっしょくすることに加え、「北辰ほくしん」への思いから本殿は弥山みせんの真北でなくてはならない。その位置は御笠湾の中央しかないと考えていた。景弘は、都の陰陽師の占いから、社殿の向きは出世運、財運を示す西北の方向と決めていた。海上に浮かぶ神殿には、確かな技術が施されなければならず、その創意工夫は、古社の創建からも学ぶことがあると、景弘は考えていた。

「数百年に一度の、大あらし…それは天地を壊滅させるような恐ろしい被害をもたらした」

その台風や山津波にも崩れぬ奥の院の構造に、景弘は注目していた。

「古社の創建に携わった土木や建築の匠…」

景弘は、そうした先人の知恵に深い尊敬の念を抱いていた。

景弘はまず、土地の古老や漁師の長おさから知識を得ることを始めた。

その中で景弘を悩ませたのが、満潮時には社殿が海に浮かんだように見せるため、砂地が見えないよう平らにして、床の高さを揃そろえなくてはならないことであった。御笠湾には御霊川ごりょうがわと滝川たきがわという二本の川が土砂と共に流れ込んでいるし、数十年に一度は土石流も起こる。永く砂浜を平に保つことが、叶かなわないこととは明白である。

景弘の下した決断は、二つの川を直接湾内に流れ込まないよう、湾に沿った新たな川を造るといふ、大

土木工事であった。

さらに、台風の際、社殿が祢山から吹き下る強風の通り道を避ける工夫や、定期的に発生する大潮の際、床板が水につかっても、社殿に影響ないようにするなど、地域に伝わる故智を最大限活用した。

こうして、水上神殿という前例のない神社建造物について、景弘は多くの匠たちと工法や精度について練り上げていった。

また、社殿建設に使う材木や栓皮の佐伯山をはじめ近隣の山からの切り出しの手配、京都から呼ぶ大勢の宮大工などの宿舎の確保、資材や人員の輸送用船の準備、食料を十分調達できるようにするための畑の開墾など、ここでも田所の伊佐や速谷神社の筑祢の、警固衆や近隣の長たちを集めての指揮ぶりが際立った。

景弘は都に上り、父頼信から聞いていた三十三間堂の建設に関わった宮大工などの紹介を頼んだ。

清盛は、景弘を呼んで、とりあえずと革袋に入れた砂金と共に、五万貫の宋銭を下賜した。それは、佐西郡を中心に瀬戸内海沿岸地域の活気を呈した。

景弘は、佐伯山から伐り出した木材を太綱で括り、大勢の人の力を合わせて麓へと下ろし、岸で待ち受けていた船に積み込んで厳島へと運んだと、土地の伝承にある。

井ノ口明神という祠がある。これが、景弘が木材を運ばせた船着場の守り神だといわれる。小己斐嶋と記述がある小さな岩山の島は、松が自生し、何やら一幅の絵を見るような美しい眺めであった。

嚴島神社造営の記録として、後世に残る『伊都岐島社神主佐伯景弘解』は完成し、仁安三年（一一六八年）十一月、朝廷に提出された。

嚴島神社の造営工事が始まったのは、翌年のことである。景弘は四十才。平家納経から五年が経っていた。

海上に浮かぶ美しい大鳥居と本舞台。両翼に回廊を巡らせた神殿の壮麗さは、絵図面を描かせた景弘自身でさえ、完成後の姿を想像しただけで、心が浮き立つものであった。建設が進むにつれ、見物に来る参拝者たちの群れは増え続けた。

清盛が出家したのは、仁安三年（一一六八年）の二月の頃であった。

前年に、清盛は太政大臣に任ぜられ、自身これ以上ない高位へと上り詰めていた。

しかし、原因不明の熱病に冒されるようになっていた。

熱病は数日続き、その間、清盛は意識さえ朦朧として過ごすことがあった。

春には、後白河上皇の女御として廷に上っていた時子の妹である滋子が、妃として建春門院の院号が与えられていた。

清盛の正妻となった時子が嫁いできたのは二十才前。その時、既に重盛と基盛の二人は先妻の高階基章の娘の間に生まれていた。

時子が生んだ最初の子は宗盛。続いて知盛・重衡に加えて娘の徳子を産んだ。時子も出家し、二位ノ尼と呼ばれた。

承安元年（一一七一年）暮に、清盛の娘徳子は後白河法皇の猶子として入内し、高倉天皇の女御となっていた。

清盛は、六波羅の屋敷から、もっぱら西八条に建てた別邸で過ごしていた。

西八条の館は、奈良時代の熊野神社に繋がる若一王子を祀る社があり、後に屋敷の鎮守として祀られた。伊勢平氏は元々が海の武人。喫水の深い大船の寄港が難しい住吉の湊に代えて大輪田の泊への宋船の寄港を考えていた清盛にとっては、その往来にも都合よく、この西八条の館は公家たちから要らざる干渉もなく、居心地のいい屋敷であった。

翌年の春、清盛は、後白河院を福原の館に招いた。福原は、大輪田の湊を目の前にした瀬戸の内海を見下ろす漁村であったが、清盛は、早くからここに新しい自分の本拠地の建設を望んできていた。

この頃の清盛の気分は、海の向こうへの逸る気持ちを抑えかねていた。清盛に、平家一門の守護神である社殿造営を決めさせた理由には、清盛自身の心の裡の、抑えようのない高揚感があった。

清盛は、高熱に魔されると床に臥せて昏々と眠り続け、熱が下がると別人のようになった。

熱が治まった清盛は、床に臥せていた時間を惜しむかのように福原の館について、さまざまな指図をして過ごした。

「福原の別邸…」

福原の建設と嚴島神社の造営は、清盛の心中でしっかり繋がっていることを、景弘は知っていた。

承安四年（一一七四年）の春。

造営成った巖島神社へ、後白河法皇は建春門院滋子を伴い、三月の十六日に京都を出発。福原を経由し、大船を仕立てて二十六日に巖島に到着した…と、『梁塵秘抄口伝集』には、書かれている。

大船は、清盛が用意した宋船であった。

この時代に天皇家や院が后妃を連れて海路を遥々旅するということではなく、初めてのことであった。

大船には、自ら迎えた景弘が付き添い、多くの警護の軍勢を従えた物々しい船団で、それは清盛の威光を示す最大級の催しであった。これは、時の最高権力者を迎える清盛にとつても、生涯で最高の見せ場になった。

御座舟には後白河法皇と建春門院が乗船し、景弘は恭しく傍に傳っていた。

御座舟と曳き舟の絢爛な海上絵巻は、鉦太鼓の音に巖かに進み、漕ぎ舟の櫓櫂は、勇壮な掛け声と共に波飛沫をあげた。

「海に浮かぶ壮麗な朱の大鳥居と神殿…」

この景観は、院の一行や公卿たちの間で、最も豪華なものと呼ばれた。

この時も、内侍が船団に同行し、巖島神社でも、景弘は芙蓉が手塩にかけた内侍を揃えていた。

その中の一人、伊予の滾燧の社の娘だったという巫女は、黒目勝ちの大きな瞳と碧な黒髪に、いつも好んで身につける墨染めの衣から、「黒内侍」と呼ばれた。

爾来、巖島神社では内侍と呼ばれた巫女が常に数十人いて重要な役割を果たし、それは江戸時代まで続いたという。

景弘は、田所の伊佐をはじめ、速谷神社の筑祢つくねに力を尽くさせ、近隣の佐伯一族の郎党だけでなく、西郡の豪族たちにも合力させ、家屋敷を提供させ、あるいは接待のための男女を召し出していった。

「この我らが土地の総結集力そうけつしゅうりきを、お見せする」

田所の伊佐も、そう嘯うそいていた。

宿坊や宴席のための新築・改築、あるいは家具調度を揃そろえるだけでも、膨大な費用が掛った。

景弘は、近隣の「海の幸・山の幸」を集め、料理人を京の都から招き、地元でも、総動員させた。

景弘は、大野の赤人あかひとに命じて、

「この佐伯の辺り、手を尽くして四里四方の産物を集めよ…」

と、改めて膳ノ司の役目を与えた。

景弘は、この機に、思い切った人の登用を図った。

「己が役に立つという思いこそ、束ねに力を示すもの…」

景弘は、小鷲丸こじうまるに、そう語った。

海から遠く離れた京の都にあつては、貴族といえども、殆ど新鮮な魚介ほたてにありつけることは叶かなわなかつた。

「懐から物を取り出すように、魚が獲れ申す…」

安芸の海山の幸に、客は、一様に「喝采」の言葉を送った。

この贅ぜいを凝らした新鮮な食材の膳は、この安芸地方に定着し、この地に住む庶民の間でも、「四里四方」という言葉と共に、後の世まで豊かな調理や献立の文化として継がれた。

安元二年（一一七六年）十月。

平家一門による「千僧供養」の法要が、厳島神社で盛大に行われた。

この壮大さは、前代未聞だと称えられた。

清盛と正室時子、重盛はじめ一族が揃って厳島へやってきた。

大鳥居と共に鮮やかな朱塗りを見せる神殿の舞殿と回廊に、一族の者に加えて千人を超す僧らが並び、その壮麗な法要の儀式は、遠く離れた対岸の浦里からも、その煌びやかな様子は窺い知れた。

夜になってからの大鳥居の外まで灯した「万灯籠」の明かりは、対岸の地御前の社や景弘の屋敷や近隣の家々にまで届き、まるで不夜城の観を呈していた。

景弘は、筑祢に囚り、宮中でも滅多に使わぬ雪洞・行灯を館の隅々に置き、大きな蠟燭の灯を絶やさなかった。夜会には、座敷に明かりを点す長檠・短檠を贅沢に置き、随行してきた女房たちも夜の暗さを忘れた。

松明を掲げた平家一門の侍たちや、景弘の配下の地侍たちも、一里に亘って浜みちに居並び、警護のための船上からの篝火の明かりも絶えることはなかった。

千僧供養の前夜、厳島で行われた万灯会は、社殿の東西から大鳥居を挟む形で柵を巡らし、三尺の間隔で上下に高々と松明を点らせた。その一大光明の模様は、

「海底、ひとえに火を敷くが如し」と、『伊都岐島千僧供養日記』にもある。

折から、厳島の弥山の峰々や麓には、紅葉の錦で飾られ、谷を下る清水に流れる鮮やかな落葉の風情も、

京丹後のそれとは一味異なり、都人を堪能させていた。

この「千僧法要」における景弘の接待は、僧や平家侍たちをもてなした内侍だけでなく、宿坊や宴席の豪華なことといったら、この世のものと思えぬ豪華さを誇った。

清盛一行の滞在は、二十日間に及んだが、景弘のもてなしは、住吉の湊で船を仕立てた時から、始まっていた。

片道七日間を費やした船旅の道中も、景弘は万全な警護に目を光らせてただけでなく、船上の一行を飽かさず愉しませた。

船旅の無聊を慰める役を受け持ったのは、内侍たちである。

いつかの宇治の平等院で、景弘が目にした阿弥陀堂内の長押の上に浮き彫りにされた「空中供養菩薩」が楽器を奏でる天女さながらの巫女たち。そこで繰り広げられた歌舞音曲の舞台に平家一門悉く酔い痴れていた。

千僧供養は大潮の三日間が選ばれて行われた。

満月の夜、海面は社殿の床下まで達し、まさに海上社殿の観を呈した。この厳島の浜辺は、自然が見せる最も壮大な海の嘉典を繰り展げていた。

清盛は、潮の満ち干きで次第に穏やかになっていく厳島の瀬戸の風景に、深い感動を覚えていた。

清盛の法名「浄海」は、この目の前の瀬戸のように鎮まってくる海に心の平安を準えたものに違いなかった。

厳島神社に奉納された舞楽は大陸より渡ってきた朝廷の祭祀の楽舞であり、大社大寺で盛んに舞われ、

古式のままの姿で後の世まで長く厳島神社に遺された。

この舞楽こそ、清盛の土産であった。

どこか異国の香りがするこの舞楽に、清盛は華やかな文明の光を感じていた。

当時、宮中でしか目にできぬものを、清盛は、この海の守護神である厳島神社にも雅楽として定着させていた。

一方で、景弘は、肩の凝らぬ愉しい伎楽の舞を巫女たちに舞わせた。

景弘は、内侍にいいつけ、美しい打衣姿や白拍子姿で舞わせ、舞台だけでなく宴席の平家一門にも傳かせた。

高倉天皇と清盛の娘徳子が厳島へ訪れたことは、清盛にとっても景弘にとっても、生涯の最も晴れ舞台となった。

治承四年（一一八〇年）九月。

景弘は、この時の功により従五位を授かり、安芸一国だけでなく、瀬戸内の西播磨から淡路、讃岐、備前、そして安芸灘はもちろんのこと伊予灘に至る広い海域にも、力が及んでいた。

「父が、いつか訓じてくれた、歩みのかぎり…ということ」

父がいう歩みの限りとは、行動範囲のことであった。それが増えれば、自ずと責任も重くなる…ということを、景弘は肝に銘じていた。

安芸守としての景弘は、国守として善政を布いた。

「手を組むことで大きな利を得る…」

という景弘の施策は、大きな包容力を持って国の郡・郷に豊かな実りをもたらしていた。

「父頼信のいう、命の温もりのある内海：それは、人々の暮らしの温もり…」

景弘は、造営成った巖島神社の壮麗な佇まいが、未来永劫、この国の人々の繁栄をもたらし、安らかな日々を約束するものであつて欲しいものと願つた。

平家にあらざれば人に非ず：そんな比喻を口にした者がいたほどの栄華であつたが、安元二年（一一七六年）の建春門院滋子の死去は、平家の最初の暗い翳りであつた。さらに追い討ちをかけたのが、三年後の清盛の長男重盛の死であつた。

福原において宋との交易に専念していた清盛の、後白河院との対立もその翳りの一つであつたかも知れなかつた。

養和元年（一一八一年）清盛の死後、あれほど強靱な組織と互いの助け合いを誇つた瀬戸内の警固衆の結束が、いつか時を経るに従い、緩んできていた。

それは、公家化していった平家一門の多くが都から出て行くことをせず、絆が失われていったことに起因していた。

後白河院の子、以仁王の決起は、源氏の復権へのきつかけになつていた。

木曾義仲の都への進撃は、傍若無人な乱暴ぶりで都人の眉を顰めさせたが、平家の侍は、もう以前のような武人の力を持ち合わせていなかった。

かつて清盛が助命した源頼朝や源義経の軍勢に敗れた平家は、讃岐の屋島へと退き、ついに壇ノ浦で海の藻屑と消えたのである。

そんな時代の移り変わりに、景弘は、自分の国を守ることに全精力をかけた。

「我らが仕えたる主君は清盛どの。平家には非ず：」

という思いが、景弘にはあった。

佐西郡の実りは、清盛の繁栄を支えてきたものでもあった。その成果の一つが厳島神社造営であった。「小さな魚は、群れて集団となり、強い敵に立ち向かう」

景弘は、子どもの頃、大野の赤人から諭された教えを、ずっと心に留めていた。

「弱いものを苛んではならぬ」

と、母は常日頃戒めていた。

この訓えも、生涯景弘の安芸守としての政務に生かされていた。

「都に異変があっても、我が領地は安泰であらねばなるまい：」

この景弘の時代を超えた壮図には、未来永劫安芸国には厳島神社という「類稀な美しい守り神」が存在するという強い自負が裏打ちされてあった。

清盛と厳島神社の盛名の陰に隠れて、佐伯景弘の名は地元でも知られていない。

年間三百万人以上の観光客がやってくるという宮島。それを支える厳島神社の造営に心血を注いだ景弘こそ地元の英雄である。

西行法師は、晩年に頼朝に召され、和歌の道について講を求められた。

その時、頼朝は、かつて都一と言われえた佐藤義清の武士としての盛名にも触れ、刀術者の話にも及んだ。あるいは西行は佐伯景弘との因縁についても語ったかも知れず、後の佐伯家への処遇にも好影響があったことは推察できた。

九百年が過ぎ、今も広島県下には、九十を越す厳島神社がある。

鎌倉幕府の成立で源氏による武家政治が始まるが、佐伯景弘は、頼朝を中心とした政權と巧妙に立ち回り、平家と関係深い厳島神社を少しも損なうことなく未来に伝えることに成功したのである。

愛媛、香川県などに景弘の面影を偲ぶ山車の幕絵が残っている。豪放磊落な武者絵は、かつてこの辺りに君臨した景弘の足跡を僅かに残している。

厳島神社と宮島の自然林。

こうして現在目の前に見ることができるとすばらしき遺産を、世のために活用することこそ、私たちにとつても、これを遺してくれた人たちへの恩返しというものではないだろうか。